Acanthus

（土浦一高・旧土浦中学とその周辺の物語）

第１７２号　2023（令和５）年１１月１４日

茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会
ＨＰ　http:www.sin-syu.jp/

進修同窓会 HP にアクセス

明治期の北条宿

高田は、写真中央の「つくば道道標」に腰を掛けて、友人の稲葉君を待っていた。

筑波登山　1

修学旅行のコースからは外れた筑波山ですが、土浦中学生たちは、休みを利用しては筑波峰に挑んでいました。1910［明治43］年10月には、中12回生20余名が、日光方面への修学旅行の足試しに、筑波山行を試みています。その山行を高田保は、『進修第14号』（1911年３月刊）に「筑波登山」と題して寄稿しています。今号から３回に分けて掲載します。

引用文中の旧字体は新字体に改めました。【　　】は筆者による注記です。また、筑波山登山ルートを進修同窓会ＨＰの『月刊 Acanthus』第172号３頁に掲載しています。

なお、高田については、本紙第18号と第20号とに既述しています。

筑波登山

三年　高田　保【中12回】

秋が来た。

三年生の修学旅行方面(注1)は、日光前橋と定まつたさうだ。足尾から大間々まで十二里、しかも崎嶇【きく　山路の険しいさま】たる山路を突破せねばならぬのだ。

「男だよ。歩けなくつてどうする！」。力んでは見たが、さて、関東平野に産声【うぶごえ】あげて、山と云や筑波の紫(注2)を仰ぐより外、何んにも知らぬ連中のこと、内心聊【いささ】か心細き感ありといふわけで、先づ足試しとして筑波山神に詣づるの計画が起つた。

勿論。僕等のことだ。平凡な――宿屋の厄介になるやうな――旅行ぢやない。頂上に泊るんだ。五軒茶屋(注3)で夜を明かさうといふのだ。

一部の人は、米を携へて行つて、麓から鍋を借りて担ぎ上げて、自分で炊【かし】がう。塩を振りかけて握つて食ふのも可【よ】からうぢやないか、とまで主張したが、果して頂上で炊げるかしら、と疑念が出て、とうとう、飯だけは麓の民家に頼むことゝして、愈【いよいよ】、十月の八日、土曜の放課後直に出発することに一決した。

破天荒(注4)――、人は許さぬかも知らぬが、僕等は自ら許して、破天荒の快挙といふ。いや頑張る。が然し、時節柄南極探検(注5)の向ふを張るかと間違へられては、済まぬから取り下げようか。

(注1)三年生の修学旅行方面

10月18日から22日まで、次の行程で、3・4年生合同の修学旅行が予定されていた。

（🚃 鉄道　…徒歩　～～舟

10 18 土浦 🚃 友部 🚃 小山 🚃 宇都宮 🚃

日光…霧降滝…日光…神山旅館泊

10 19 宿…東照宮…華厳滝…中禅寺湖畔…蔦屋泊

10 20 宿…中宮祠前～～阿世潟…足尾泊

10 21 宿…花輪（昼食）…大間々停車場（現両毛線岩宿駅）🚃 前橋泊

10 22 宿…前橋共進会会場…前橋 🚃 小山 🚃 友部 🚃 土浦

(注2)筑波の紫

筑波山は、「紫峰」という別称（雅称）でも呼ばれる。これは、江戸時代前期の俳人で、松尾芭蕉の高弟であった服部嵐雪（らんせつ　1654［承応3］年～1707［宝永4］年）が詠んだ「雪は申さず　先づむらさきのつくば山」の句が始まりのようである。また、江戸中期の俳人・与謝蕪村（1716［享保元］年～1784［天明3］年）は、1742［寛保2］年からの約10年間、下総国結城（現結城市）に滞在し、嵐雪の句を踏まえて、「ゆく春や　むらさきさむる　筑波山」と詠んでいる。この頃から、「むらさき」が筑波山の別称として定着したようである。

(注3)五軒茶屋

ケーブルカー山頂駅のある平坦地は、男体山・女体山の二神が御幸（往来）する「御幸ヶ原」と呼ばれ、そこには、依雲亭・迎客亭・遊仙亭・向月亭・放眼亭の5つの茶屋があり、「夫婦餅」や田楽豆腐などが販売されていた。

(注4)破天荒

「天荒」は、天地未開の混沌たるさま。これを破りひらく意で、今まで誰もしなかったことをすること。前代未聞。

(注5)南極探検

当時、大日本帝国陸軍軍人で南極探検家の白瀬矗（のぶ）中尉（1861［文久元］年～1946［昭和21］年）による南極探検の計画が進められていた。1910［明治43］年12月、白瀬隊は、「開南丸」で東京から出航し、1912年1月28日、南緯80度05分・西経165度37分に到達、一帯を「大和雪原」と命名した。

暗雲低迷。今にも降りさうどころぢやない、時にばら〳〵落ちて来る。止めたがよからうと忠告する人もある。中途で戻るだらうと笑つてる人もある。

けれども稜々乎【りょうりょうこ】(注6)たる僕等の意気は、こんな事で沮【ひる】む程弱くは無かつた。怪しい空を物ともせずに、真鍋台は並木の下、北【聆吉】先生(注7)のお宅の前に集合するもの二十余名。秋も半ばを過ぎた山上の夜営、外套の準備だけは怠らぬ。

午後三時勇ましく足を揃へた。北・西尾【賴造　国語　在職1908［明治41］年～1923［大正12］年】の二先生、神立・久保田兄弟・鬼沢芳・漆野・浜野・下村・沼尻英・川並・田口信・飯田静・早川・島田・酒井勇・高安・本田・伊藤関・外に二年生中島一郎とそれからかく申す僕。いや尚（まだ）楢戸保君。

伊藤君は短褐【たんかつ　丈の短い粗末な着物】弊袴【へいこ　破れた袴】に下駄穿きの物騒な姿、朱鞘の大小が無いだけ見付けもの。高安君は小いさな足に靴をはいてる。「靴で登れるか」と先生にいはれて、ワライながら「大丈夫です」といふ。

筑波が淡い。雨が思ひ出したやうにばら〳〵と旅嚢【りょのう　旅行に携行する袋】に降る。

絶え間ない北先生の饒舌、――語弊があるかも知れぬが――に耳を傾けてる中に、足がずんずんと進んで行く。小田の宿を通る頃には、釣瓶落しの秋の日はもう傾いた。

途々、幾台もの馬車に追ひ越された。一人の馭者が馬の足掻【あしかき】を緩めながら。

「如何ですかね？生徒さんも御一緒に、」

「さうさね、屋根は岩畳【がんじょう　「岩乗」の誤記。頑丈】かえ、何しろ、三十人も

居るんだから、屋根にでも上らなくつちやね！」、

皮肉られた馭者の顔には隠されざる苦笑が泛【うか】んだ。

一たび小田山の陰にかくれた筑波が、近く姿を現はすと、もう北条がすぐ其処だ。

雨脚は稍々【しょうしょう　だんだん。次第に】繁くなつて来た。暮雨霑村橋【暮雨、村橋を霑(濡ら)す】。誰れも皆外套を着けた。

北条の町に入つたのは五時だつた。火灯(とも)し頃だ。筑波道への岐点(注8)で、稲葉顕嗣君が提灯を貸すからとあつて、持つて来て呉れるのを待つ。前の伊勢屋の女が、我家(うち)へ泊るんだらうかといふ風に、怪訝な顔をして居る。伊勢屋は、喜多八【『東海道中膝栗毛』の主人公の一人】の居さうな古めかしい宿屋だ。独り、道しるべの石に腰うちかけて、冷やかに知らぬ町の灯を眺めた時こそ、始めて、僕は旅といふ感じがした。

「腹がへつてお腹(なか)が空腹だ」と誰かゞ叫んだ。で、北条尋常小学校に入り込んで、茶湯を戴いて弁当を食つた(注9)。

提灯を降り翳【かざ】して筑波に向ふ。軍歌唱歌の声張り上げて元気の良いこと、田井、神郡【かんごおり】の村々は、小供等があたふた飛び出して眺めてる。筑波の町に近い。

凸凹道、石高道【いしだかみち　石が多くてでこぼこの道】、淙々【そうそう　水の流れ注ぐさま。また、その音。さらさら】の水声、罷り間違へば川の中へでもざぶ〳〵陥【おちい】り込みさうだ。

高く点々たる筑波の町の灯を仰いでから、一の鳥居(注10)あたりまでは、虫がしきりに鳴いて居た。声する方に提灯を差出すと、只、近い薄【ススキ】の穂が白くほのかに、闇の中に浮いて見える。

もう町だ石段続きの路を一気に駈け上る。

「お泊りさんでございますか」左右の家から烈しく声がかゝる。

雨は小降りになつて居る。

神社の前の端茶屋は、僕等の唱ふ歌に、急いで戸を開けた。

「東京の学生さんなら、江戸屋にでも泊つて居りますになあ」亀城の精華は未だ滅びず矣。我が三年生の意気を見よ。長嘯【ちょうしょう　声を長くひいて詩歌をうたう】して仰いだ峰は、闇で見えなかつた。

外交上手の北先生が交渉の結果、五軒茶屋の主人父子が同行して呉れることになつた。

明治期の江戸屋

江戸屋会長の吉岡昭文（てるぶみ）（高14回）によれば、江戸屋は1628（寛永5）年の創業以来、筑波山神社や板東25番札所大御堂への参詣客、文人墨客など、各界の名士を迎え入れてきた。多くの進学校の学習合宿なども受け入れている。

(注6) **稜々乎（りょうりょうこ）**

「稜々」は、角々しいさま。鋭く厳しいさま。「乎」は、状態を表す語に付けて語調を強める語（断乎・確乎・洋々乎）。ここでは、土中生たちの威勢のいいさま。

(注7) **北畠吉先生**（1885［明治18］年～1961［昭和36］年）

高田たちが心酔していたのが、北畠吉先生（英語　在職1908［明治41］年10月～1911［明治44］年3月）。三菱電機株式会社社長・会長や日韓会談主席代表を務めた高杉晋一（中9回）は、『同窓会報3号』（1964［昭和39］年刊）に「先生とわたし」と題して、次のように記している。

「北先生が早稲田大学を出られて土浦中学の先生になって来られたのは、私の中学三年生の時であった。今から丁度五十五年ばかり前の事である。

それから卒業まで三年間、先生から英語を教えられた。その当時の先生は、器械体操と剣道と詩吟が得意であった。声が大きく、小さな教室に響きわたる壮快な力強い音声であった。哲学の専攻だけに思想もあり理論もたしかで先生間の討論会などでは、何人も先生の議論に歯の立つ者はなかった。

常に勇気慓々として曲がった事が嫌いで、正を踏んで恐れずという風があった。従来のおとなしい型の先生達とは、全くちがって型破りの存在であった。必然の結果として、若い生徒の心をすっかり捉えてしまって全生徒の人気の中心となった。……

先生と気が合って仲のよい先生は、三人ばかりいた。大峡秀栄先生、尾崎楠馬先生、小田原勇先生である。皆北先生同様、若いはつらつたる先生達である。……」

北先生は、新潟県佐渡の出身。1914［大正3］年から早稲田大学講師。1918年渡米、ハーバード大学等で学ぶ。1922［大正11］年に帰朝。大東文化大学教授、大正大学教授。1935［昭和10］年、多摩美術専門学校（現在の多摩美術大学）を創設。

1936年には、第19回衆議院議員総選挙に無所属で当選し、政治家へと転身。当選後、立憲民政党に入党。戦後、一時公職追放になった時期を除き、1958［昭和33］年まで衆議院議員として活動した。

(注8) **筑波道への岐点（「つくば道道標」が建つ所）**

つくば道道標拓影図　1715（正徳5）年　筑波山神社蔵

(注9) **北条尋常小学校に入り込んで、茶湯を戴いて弁当を食つた。**

かつては、各学校に小使い（用務員）さんが常駐する小使室があり、かまどに火がおこされ、湯の用意がされていた。本校でも、1981（昭和56）年まで、小使室でかまどが使用されていた。

(注10) **一の鳥居**

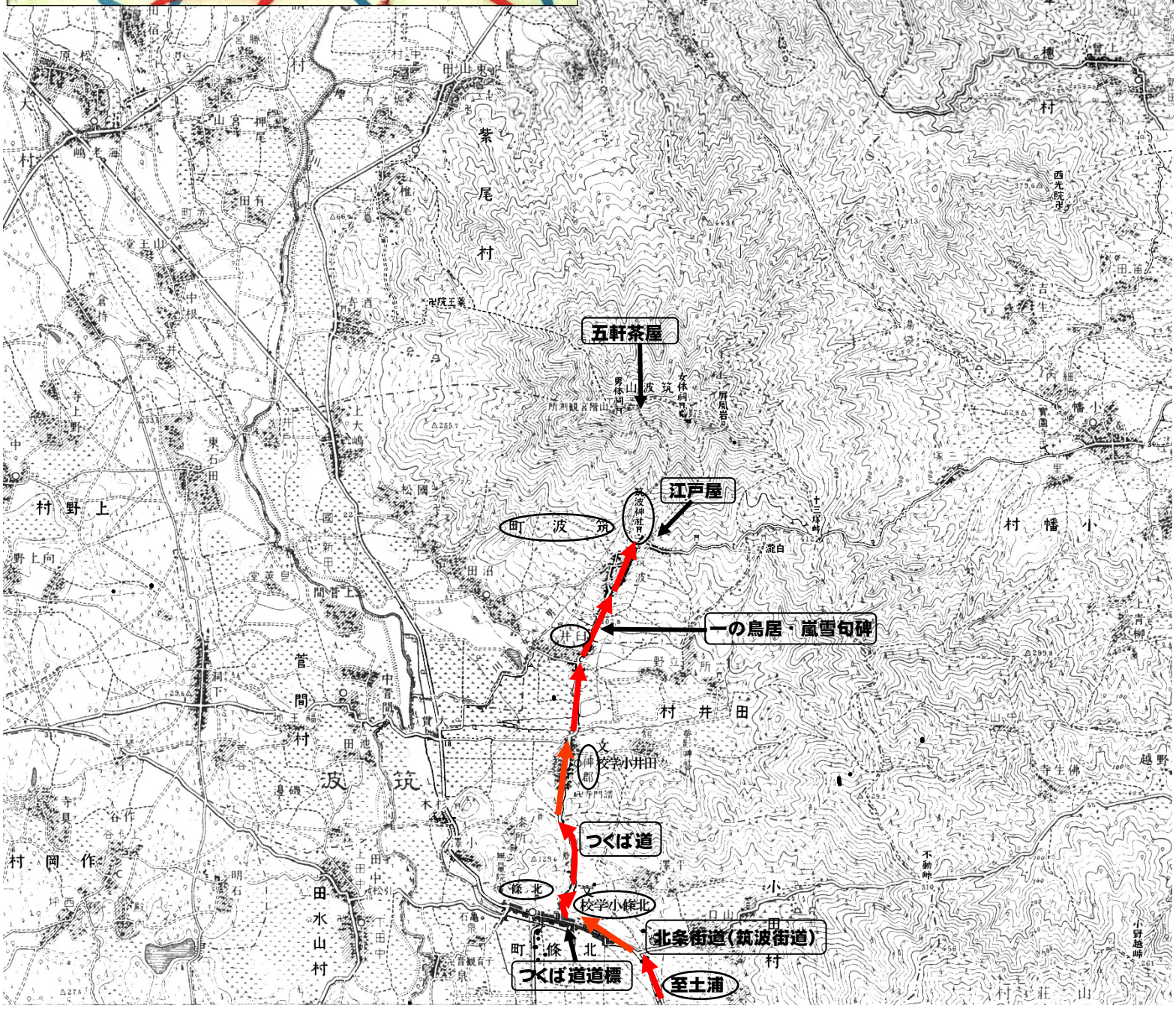
北条～神郡～臼井～筑波山神社へとまっすぐに通る「つくば道」の途中にある、石造りの鳥居で、「六丁目の鳥居」とも呼ばれる。

一の鳥居の側に建つ嵐雪句碑

（高21回　松井泰寿）

アカンサス172号　筑波山登山コース

筑波山塊地図

（明治44年発行　一部修正）

筑波山名所絵図（下）